はじめに

今から 34 年前に、藤森栄一は「いつまで編年をやるか」と発言した。ずいぶん昔のことであるが、これは考古学の方法に係わる根本的な疑問を、率直に表明した発言として、今でもその価値を失っていない。際限のない縄紋土器の編年研究とは何なのか。考古学研究の目的と手段を取り違えていないか。そうした疑問ないし批判は、初学の人の耳に入りやすく、至極もっともな響きを持つ。しかしながら、この種の批判の是非を論じるまでもなく、編年研究の必要性が、過去と現在で大きく変化したとは思えない。むしろ十年一日の如く変わらないのは、縄文土器型式研究の奥行きや現状についての、誤った認識の方ではあるまいか。

改めて述べるまでもないが、「モノ」資料を扱うことで、歴史研究の一翼を担う考古学においては、「モノ」資料の時空間上の位置を正確に捉えることは、決定的な重要性を持つ。それが誤っていれば、すべての推論や解釈はご破算にならざるを得ない。これは当然のことである。先の「前期旧石器」捏造事件は、この考古学の単純明快な原理を、極めて象徴的に再認させる出来事であった。

その事の顛末や年代を錯誤した原因について、敢えてここで論じるまでもないが、縄紋時代を例にとれば、中期末葉から後期中葉に限っても、土器型式の年代が交錯したり、傾斜したりしている地域は、列島の至るところに見出される。そうした事態は、1977 年から数えても、すでに 30 年近くに及んでいる。同様の状態は、草創期から晩期のどの時期にも、また、どの大別の移行期にも等しく認められる。

したがって縄紋時代の研究においては、各大別の編年に見られる混乱状態の解消をめざして、究極レベルの広域的な小細別編年網を確立することが、最も基礎的で困難な分野になると考えられる。そこで本論では、中期末葉～後期中葉の時期をモデルとして、編年研究の過去、現在を振り返り、規範とすべき学史上に明らかな研究指針を再確認し、それに準拠しつつ、列島レベルで各地の編年案を縦横に対比して、小細別編年網の基幹をなす関東地方における究極レベルの小細別編年案を提示したいと思う。

また最近、マスメディアを通じて喧伝されている、AMS 確率「暦年代」編年の問題点についても、少しく論評を試みたい。

第１章　編年研究における原点の見直し

第１節　東日本の中期末葉編年

縄紋時代の土器型式編年は、モースの大森貝塚の調査（1877）から、半世紀余りを経た大正末年の加曽利貝塚の発掘において、山内清男が提唱した編年案によって、初めてその基礎が固められた。それ以後、列島先史編年の体系は、山内と甲野勇、八幡一郎との協同作業によって構築されたと一般に説明されている。しかしながら山内と甲野、とりわけ八幡との間には、土器型式の区分についての考え方に深刻な差異が認められる。

山内が国体論的な考古学と対決すべく、三部作として戦略的に発表した『日本遠古之文化』・『日本先史土器図譜』・「縄紋土器型式の細別と大別」論文（以下、「細別と大別」論文）は、果たして戦前のうちに、正しく理解されていたのであろうか。この点は大いに疑問に思われる。戦後では、どうであろうか。例えば、加曽利Ｅ式や大木式に係わる諸氏の編年案を比べてみよう。すると、その無原則な型式の把握、細別法や命名法への無関心、標式遺跡や標式資料の軽視といった、土器編年研究の根本に係わる、諸々の疑問点が次々に涌いてくる。この点から見て、三部作の理解は、戦前においても、また戦後においても、大いに問題があったと推察されよう。

そうした学界の混乱状況を、加曽利貝塚編年の達成から戦後の 1960 年代まで、丹念に辿ると、「密室編年」と評された山内博士の『ミュージアム』編年案（「加曽利Ｅ１～４式」・「称名寺式」の記載）や、いわゆる加曽利Ｅ式の「５細分メモ」の真相は、きわめて明快に理解できるようになる。また、この学史の見直しによって、列島編年体系の根幹をなす関東編年体系が、改めて平成の時代に蘇ることとなろう（**「加曽利Ｅ式土器の細別と呼称　―加曽利貝塚編年の達成と混乱の戦後研究史―」**）。

加曽利Ｅ式に類似した問題点は、東北の大木式編年にも存在する。とりわけ、かつて林謙作氏が松島湾の「称名寺系土器」（林 1965）と誤解した「アルファベット紋土器」の位置づけをめぐっての混乱が著しい。この問題についての正しい見通しは、馬目順一氏によって、『ミュージアム』編年に先立ち、1968 年に提出されていた。丹羽茂氏は、それに不適切な評価を与え、伊東信雄・林謙作氏らの「大木 10 式＝後期初頭」説の誤謬を糊塗してしまった。同時に、標式資料の重要性をも等閑にして憚らない考え方を、広く関東北に蔓延させる役割を、未必のうちに果たしてしまった。

その事の真相は、丹羽氏が発表した一連の論文を分析すると、きわめて明瞭に理解できる。南奥のみならず、東北における拡大「大木 10 式」編年論や「大木 10 式」後期初頭説

の誤謬は、大木各式の標式資料の分析を踏まえ、欠落していた中間型式（大木 9·10 式）を新たに認定し、「大木 10 式」の範囲を正確に捉える姿勢、即ち山内博士の標式資料の吟味に基づいた馬目編年の提案を追従することによって、容易に解消できると考えられる（**「『小名浜』台の上遺跡編年考　—学史から南奥と中奥の中期末葉編年を考える—」**）。

第２節　西日本の中期末葉～後期初頭編年

土器型式の把握をめぐる混乱は、さらに西日本において顕著に認められる。そのような混乱がなぜ生じたのか。その学史的な検討は終章で述べるとして、西日本編年において基幹をなす編年体系は、誰によって、どのように構築されたのか。そして、その業績は、現在の西日本編年において、どのように生かされているのか。先の三部作が世に問われる以前、西日本の編年体系は、山内博士の独力の研鑽によって、関東・東北との比較によって構築されていた。その過程を、残された断片的な情報をもとに推論すると、無類の体系性のもとに試案されていた列島編年体系の原形が明らかになる（第１表）。（**「『日本先史土器図譜』以前の列島縄紋土器編年の原案　—東西列島編年の絆—」**）。

しかしながら、敗戦とともに記紀神話から開放され、華々しく登場した戦後考古学において、山内編年学の真髄は、速やかに理解されなかった。その歩みの東北・関東における混乱の研究史については、以上の記述で明らかにしたとおりである。では戦前に、山内列島編年の世界とは無縁であった西日本の編年研究は、どのように再出発を遂げたのか。果たして、「細別と大別」論文に準拠した編年研究が広く展開されたであろうか。

山内博士と戦前に対立していた三森定男の縄紋土器編年から、小島俊次や鎌木義昌・木村幹夫、佐原真、岡田茂弘・高橋護・間壁忠彦・堅田直、そして小都隆等、に至る 1977 年以前の諸氏の編年案を検討してみると、いずれも中期末葉と後期初頭の土器を一体化し、山内編年の体系を換骨奪胎した「短縮編年」説を唱えていることが、一目瞭然に明らかになる。したがって 1976 年の時点では、西日本の編年界は、未だ「細別と大別」論文以前に止まっていたと言わざるを得ない（**「西日本における中期末葉～後期初頭「短縮編年」説の展開—戦前から 1976 年まで—」**）。

第２章 東北地方と北海道南部の編年

第１節 東北南部の中期末葉～後期中葉

東北地方の編年には、大きく見て三つの問題点がある。第一は、大木９・10 式間の欠落

第１章　編年研究における原点の見直し

第１節　東日本の中期末葉編年

縄紋時代の土器型式編年は、モースの大森貝塚の調査（1877）から、半世紀余りを経た大正末年の加曽利貝塚の発掘において、山内清男が提唱した編年案によって、初めてその基礎が固められた。それ以後、列島先史編年の体系は、山内と甲野勇、八幡一郎との協同作業によって構築されたと一般に説明されている。しかしながら山内と甲野、とりわけ八幡との間には、土器型式の区分についての考え方に深刻な差異が認められる。

山内が国体論的な考古学と対決すべく、三部作として戦略的に発表した『日本遠古之文化』・『日本先史土器図譜』・「縄紋土器型式の細別と大別」論文（以下、「細別と大別」論文）は、果たして戦前のうちに、正しく理解されていたのであろうか。この点は大いに疑問に思われる。戦後では、どうであろうか。例えば、加曽利Ｅ式や大木式に係わる諸氏の編年案を比べてみよう。すると、その無原則な型式の把握、細別法や命名法への無関心、標式遺跡や標式資料の軽視といった、土器編年研究の根本に係わる、諸々の疑問点が次々に涌いてくる。この点から見て、三部作の理解は、戦前においても、また戦後においても、大いに問題があったと推察されよう。

そうした学界の混乱状況を、加曽利貝塚編年の達成から戦後の 1960 年代まで、丹念に辿ると、「密室編年」と評された山内博士の『ミュージアム』編年案（「加曽利Ｅ１～４式」・「称名寺式」の記載）や、いわゆる加曽利Ｅ式の「５細分メモ」の真相は、きわめて明快に理解できるようになる。また、この学史の見直しによって、列島編年体系の根幹をなす関東編年体系が、改めて平成の時代に蘇ることとなろう（「**加曽利Ｅ式土器の細別と呼称　―加曽利貝塚編年の達成と混乱の戦後研究史―**」）。

加曽利Ｅ式に類似した問題点は、東北の大木式編年にも存在する。とりわけ、かつて林謙作氏が松島湾の「称名寺系土器」（林 1965）と誤解した「アルファベット紋土器」の位置づけをめぐっての混乱が著しい。この問題についての正しい見通しは、馬目順一氏によって、『ミュージアム』編年に先立ち、1968 年に提出されていた。丹羽茂氏は、それに不適切な評価を与え、伊東信雄・林謙作氏らの「大木 10 式＝後期初頭」説の誤謬を糊塗してしまった。同時に、標式資料の重要性をも等閑にして憚らない考え方を、広く関東北に蔓延させる役割を、未必のうちに果たしてしまった。

その事の真相は、丹羽氏が発表した一連の論文を分析すると、きわめて明瞭に理解できる。南奥のみならず、東北における拡大「大木 10 式」編年論や「大木 10 式」後期初頭説

の誤謬は、大木各式の標式資料の分析を踏まえ、欠落していた中間型式（大木 9·10 式）を新たに認定し、「大木 10 式」の範囲を正確に捉える姿勢、即ち山内博士の標式資料の吟味に基づいた馬目編年の提案を追従することによって、容易に解消できると考えられる（「**『小名浜』台の上遺跡編年考　—学史から南奥と中奥の中期末葉編年を考える—**」）。

第２節　西日本の中期末葉～後期初頭編年

土器型式の把握をめぐる混乱は、さらに西日本において顕著に認められる。そのような混乱がなぜ生じたのか。その学史的な検討は終章で述べるとして、西日本編年において基幹をなす編年体系は、誰によって、どのように構築されたのか。そして、その業績は、現在の西日本編年において、どのように生かされているのか。先の三部作が世に問われる以前、西日本の編年体系は、山内博士の独力の研鑽によって、関東・東北との比較によって構築されていた。その過程を、残された断片的な情報をもとに推論すると、無類の体系性のもとに試案されていた列島編年体系の原形が明らかになる（第１表）。（「**『日本先史土器図譜』以前の列島縄紋土器編年の原案　—東西列島編年の絆—**」）。

しかしながら、敗戦とともに記紀神話から開放され、華々しく登場した戦後考古学において、山内編年学の真髄は、速やかに理解されなかった。その歩みの東北・関東における混乱の研究史については、以上の記述で明らかにしたとおりである。では戦前に、山内列島編年の世界とは無縁であった西日本の編年研究は、どのように再出発を遂げたのか。果たして、「細別と大別」論文に準拠した編年研究が広く展開されたであろうか。

山内博士と戦前に対立していた三森定男の縄紋土器編年から、小島俊次や鎌木義昌・木村幹夫、佐原真、岡田茂弘・高橋護・間壁忠彦・堅田直、そして小都隆等、に至る 1977 年以前の諸氏の編年案を検討してみると、いずれも中期末葉と後期初頭の土器を一体化し、山内編年の体系を換骨奪胎した「短縮編年」説を唱えていることが、一目瞭然に明らかになる。したがって 1976 年の時点では、西日本の編年界は、未だ「細別と大別」論文以前に止まっていたと言わざるを得ない（「**西日本における中期末葉～後期初頭「短縮編年」説の展開—戦前から 1976 年まで—**」）。

第２章 東北地方と北海道南部の編年

第１節 東北南部の中期末葉～後期中葉

東北地方の編年には、大きく見て三つの問題点がある。第一は、大木９・10 式間の欠落

していた「中間型式」認定の是非に係わる。第二は「門前式」の内包と外延、及び細分の徹底、第三は、「十腰内Ⅰ式」の年代的な位置づけである。

最初の問題点では、山内博士が設定した大木９式と 10 式の標式資料の分析が眼目となる。両式の間には、松本彦七郎が提唱した「青島式」に相当する未命名の細別が介在すると予想される。紋様描線の扱い方（「紋様描線論」）と器種の作りわけ法（「器制」）の差異性に注目すると、大木９・10 式と「青島式＝アルファベット紋土器」の違いは鮮明に捉えられる。この違いは、誰にでも一目瞭然、容易に認め得るものであり、未命名の細別が実在することは、型式・層位・地点の差異から見て、疑いないと考えられる。そこでアルファベット紋土器を「大木 9-10 式」として正式に提案したい。この欠落型式の挿入によって、中期末葉の短縮編年的な広域編年観から脱する道筋が、初めて東北地方から拓かれることになろう（**「大木 9-10 式土器論　－紋様描線と器制論の観点から－」**）。

縄紋土器研究の歴史は一世紀を超える長さを有している。しかしながら究極レベルの細分は、一型式たりとも未だ達成されていない。精密な編年網を列島レベルで構築するには、ある細別型式について、モデルとなる究極の細分作業を達成しておかなければならない。

そこで大木 10 式に注目すると、山内博士の「標式資料」には最古と最新の標本例がきちんと選択されている。この標式資料と諸遺跡の資料を比べると、どこでも「10a 式→10b 式→10c1 式→10c2 式→10d1 式→10d2 式」の序列で変遷することが、層位差と地点差から証明できる。同様にして、後続する門前式の標式資料を分析して、系統としての「門前式」の範囲を拡大し、その細分を徹底すると、多くの階梯に分けられる（門前１～４式）。大木 10 式→門前式なる東北編年は、関東から西日本の諸編年を見直すための最良の編年軸になるであろう（**「大木 10 式土器論」続考－大木 10 式と門前式細分の見直し－**））。

秋田県八木遺跡の新資料には、先の門前式に加え、後期前葉の宮戸１b 式（堀之内１式並行）の細分に寄与する良好な資料が含まれている。その分析をもとに東北北半の編年を見直すと、大木 10 式並行の「大曲１式」を後期初頭とし、また後期中葉の十腰内１式（堀之内２式並行）を前葉に比定するなど、著しい混乱が認められる。型式・層位・地点の差異をもとに、この通説編年を見直すと、東北地方の後期初頭～中葉の編年は、第２表のように改訂されることになる（**「東北地方における後期初頭～中葉編年の問題点　－秋田県八木遺跡の見学から－」**）。

第２節　東北北部・北海道南部の中期後葉～後期初頭

東北北半編年の混乱は、大木 10 式期以前にも顕著に見られる。戦前では、周圏論的な

傾斜編年論を唱えていた角田文衛（角田 1936）、戦後では、『岩木山』所収の田村編年（田村 1966）、それを継承した鈴木克彦氏の編年案（鈴木 1976）が代表例としてあげられる。諸氏の編年案を遺跡単位の編年を交差対比させながら検証すると、諸々の矛盾点が明らかになる。その詳細な吟味の結果は、第１図のように纏められる。この図表では、加曽利Ｅ式並行の諸型式が、陸奥から信濃までの範囲において、どこでも６単位の変遷を辿ることを明らかにした（「**「榎林式」から「最花式」（中の平Ⅲ式）へ　―陸奥中期後半編年から広域編年へ―**」）。

以上の検討によって、青森以南の地域における土器変遷の大要は明らかとなった。つぎなる問題は、青森以南の編年と北海道編年の対比である。これには先に触れた『岩木山』所収の「田村編年」の見直しが前提となる。また、地方色の濃厚な大木 10 式並行土器の小細別レベルの編年も試案しなければならない。後期初頭とされた「大曲１式」を細分し、それに内包すべき資料を分析すると、青森の中期末葉土器は、前半と後半で大きく変化する様子が観取される。後期初頭には、岩手の北部から青森一帯に隆起線上に縄紋を施紋する独特な土器が登場する。その変遷の大要は、明らかに渡島半島の南岸域にも共通する。ただし渡島では、青森側には分布しない箍状の縄紋帯を施す土器群が多量に出土しており、以北の地域との密接な関係性を際立たせている。大木９式～大木 10d2 式に至る仙台湾～渡島半島までの対比編年は、第２図と第３表のように纏められる（「**『岩木山』編年の再検討・北奥「大木 10 式併行土器」編年の見直し**」）。

第３章　関東地方及び南奥の編年

第１節　東部関東と福島の中期末葉編年

東北の大木９～10 式をめぐる混乱は、関東にも大きな影響を与えている。古くは加曽利EⅢ・Ⅳ式の不在論（堀越 1972）として、近年では加曽利 E3 式・E4 式の拡大論となって、論者を交代しながら次々に新たな混乱を重ねている。この混乱を根本から解消するには、まず細別論の立場から、加曽利 E3 式と E4 式の間に欠落した中間式を認めることが肝要と思われる。そこで南奥から西日本にまで視野を拡大して、並行する各地の土器群を摘出すると、第４表のごとき編年案が得られる。この編年案によれば、泉拓良氏の最新の「北白川Ｃ式４期」編年案は、今村氏の 1977 年編年とともに、再考の余地があると考えられる（「**加曽利 E3-4（中間）式と広域編年の予察　―竜ヶ崎市南三島遺跡出土の土器から―**」）。

加曽利 E3·4 式に後続する E4 式は、1970 年代に入ると、後期初頭の称名寺式と並行すると盛んに主張されるようになった。その影響は頗る強力で、今もこの「短縮編年」説を

支持する人は多数派を占めている。この説の根拠は一般に、西関東の混在した柄鏡型住居址出土の「一括資料」に求められている。

しかしながら、南奥から茨城県に分布する加曽利 E4 式を細かに分析してみると、どこでも大木 10 式と同様に 6 小細別の変遷をたどり、続加曽利 E4 式と称名寺式へスムーズに移行する様子が観取される。したがって、西関東で後期初頭と見做している西日本系の土器群は、称名寺式ではなく、中期末葉土器と考えねばならない。そのような視点から、今後は諸資料の見直しが課題となろう（**茨城における加曽利 E4 式編年の検討**）。なお、この茨城県編年の妥当性は、福島の浜通り資料を検討すると、大木 10 式との交差対比によって容易に傍証されることを付け加えておきたい（「**福島県における中期末葉編年の検討　ー浜通り地方を中心としてー**」）。

第 2 節　西部関東の中期末葉～後期初頭編年

中期末葉と後期初頭の「短縮編年」は、主に神奈川県の資料を用いて唱えられている。称名寺貝塚の標式資料をはじめ、勝田第六・稲ケ原 A・松風台、及び東京都の大蔵・平和台 No. 1 遺跡等の資料を分析すると、いずれも西日本系の中期末葉土器を「称名寺式」と認定しているために、無用の混乱を招いていることが分かる。この型式の誤認は、吉田格氏提唱の「称名寺式」に由来しており、本州編年の混乱を解消するには、その「称名寺式」の標本資料の見直しが今後の課題となろう（「**神奈川県における中期末葉編年の検討**」）。

関東地方では、どこでも称名寺式と加曽利 E4 式が同時代に存在したと考えられている。しかしながら、環関東圏内の土器群を広く比較すると、称名寺式と確実に共伴しているのは、加曽利 E4 式に後続して登場した（仮称）続加曽利 E4 式である。両者の関係は、住居址出土の一括土器で容易に証明されるから、西日本においても、通説の「短縮編年」説を見直し、中津・称名寺式に共通した「パネル装飾手法」の登場を以って、中期と後期の境を画す必要があろう（「**環関東圏における続加曽利 E4 式と称名寺式の出会い**」）。

関東地方でも武蔵野台地に焦点を当てると、後期初頭土器の複雑な成立過程が観取される。類似の状況は、埼玉の南部や千葉の西部域にも認められる。「パネル装飾」の手法を駆使した、真の称名寺土器に対して、その影響を受容しつつ、加曽利 E4 式の伝統に固執し、両者の折衷的な特徴を有する土器群が誕生している。その内容や地域的な差異は詳らかでない。しかしながら異系統土器が進入し、それに伴って土器変容を生じ、やがて土器系統の融合に至る一連の現象は、先史時代に起きた社会的な事件を推測させる。編年体系の混

乱を速やかに解消し、今後は土器社会論的な観点から、この問題の解明が求めらることになろう（「**武蔵野台地周辺における後期初頭土器の成立**」）。

第４章 西日本の編年

第１節　中期末葉～後期初頭の編年

西日本の後期初頭初頭を飾る型式としての「中津式」の地位は揺るぎない。しかしながら、何を以って「中津式」と認定するか。細別型式としての範囲や細分、広域対比について、識者の意見は一致していない。中津貝塚の水原資料をはじめ、福田・片吹・健行田等の資料を比べると、通説の「中津式」は、称名寺式と同様に中期末葉の土器を含むことが判明する。この点を踏まえて、瀬戸内と近畿北部を対比して東日本の編年体系に挿入すると、第５表のように纏められる（「**瀬戸内における中期末葉編年の再検討**」）。

西日本では、中期末葉編年の混乱とともに、後期初頭の「中津式」の細分にも大きな混乱が見られる。それを是正するための編年案は 1980 年から繰り返し発表しているが、未だ十分な理解を得るに至っていない。そこで、四国の矢野遺跡の新資料に焦点を当て、層位と型式の差異を拠り所として中津式を１～４式に細分し、洗谷貝塚や中津貝塚との対比を試みた。その結果を東北～九州の広域編年体系の中に挿入すると、第３図のような編年案となる（「**西日本における後期初頭編年の検討　－四国から瀬戸内と近畿の編年を結ぶ－**」）。

第２節　後期前葉～中葉の編年

編年の混乱は「中津式」以後にも及ぶ。西日本編年の体系は、山内・鎌木編年を改編した今村編年 (1977) から、泉氏や千葉氏の編年案 (1982・1985・1989b, 1989・1992・1995) の提唱によって達成されている。しかしながら、この編年案では、後期前葉の「福田 K2 式」や「中津Ⅲ式」を「称名寺Ⅱ式」と対比し、中葉に下る「北白川上層式１期」や「津雲Ａ式」を堀之内１式並行と見做している。これでは本州島の後期前半編年は、至るところで年代が傾斜し、交錯することとなる。

そこで瀬戸内から北九州・四国の土器群を改めて分析すると、後期前葉：「中村石丸式・(前)小池原上層式・平城１式，鐘崎１式・小池原上層式・平城２式」→「鐘崎２式」の順に編年され、各々「堀之内２式」→「加曽利Ｂ式」に並行するという結論になる。その大要は第４図と第６表のように纏められる（「**西日本における後期中葉編年の検討　－津雲 A 式・彦崎 K1 式から小池原上層式・鐘崎式・平城式へ－**」）。

瀬戸内以西に加えて、西日本では近畿編年の混乱の解消が問題となる。千葉氏や泉氏の編年を離れ、関東編年との正確な対比に基づいて、根本からの見直しが必要であると思われる。そこで堀之内１式の６小細別編年をもとに、広域分布を示す「∈」マークをメルクマールとして、主要遺跡の資料分析したところ、後期前葉と中葉の土器が至るところで混同されていることが判明した（「広瀬土壙40段階」・「北白川上層式１期」、「芥川式」・「新徳寺式」など）。新しい近畿編年を旧論の環瀬戸内編年に挿入すると、第７表のように纏められる（**「近畿地方における後期前葉～中葉初頭編年の再検討」**）。

第５章　列島広域編年の検討

第１節　中期末葉～後期初頭の編年　－渡島半島から西日本までを結ぶ－

中期末葉の編年の混乱は本州島の至るところで認められる。それを解消するには、各地の編年案を見直すとともに、それらを広域的に交差して、旧来の編年体系を根本から見直さなければならない。その作業の要となるのは、欠落していた中間型式、加曽利 E3-4 式の認定である。そこで細別論、学史論の観点から加曽利 E3-4 式を仮設し、さらにⅠ・Ⅱ・Ⅰ°紋様帯論の観分析を踏まえて、中期末葉～後期初頭の土器変遷を見直すと、通説とは異なる第８・９表のごとき列島レベルの広域編年体系が構想されることになる（**「加曽利 E3-4（中間式）考　－中期後半土器の広域編年の観点から－」**）。

この構想案に対して、加曽利 E3-4 式・E4 式は、後期初頭の称名寺式と同時代の細別であるという反対意見が 1995 年に登場した。住居址内から出土した「一括資料」の組成が、複数の細別型式を有した土器相を証明しており、それらの同時代性は疑いないという主張である。しかしながら、渡島半島から関東地方の資料を広域的に一覧してみると、大別中期と後期の土器を混交させるような「短縮編年」説は、とうてい成立し得ないと考えられる。渡島から南関東に至る諸遺跡の編年を丹念に対比すれば、そうした推測は造作も無く先史時代の事実として判明する。戦前に山内博士が構想したとおり、東日本の中期末葉は、大木 10 式（加曽利 E4 式並行）で終焉し、後期初頭は、称名寺式や六反田(古)式（門前式並行）で始まるという見方で、何ら変更の必要は認められない（第５・６図）。今後の研究では、中期末葉と後期初頭の土器の正しい弁別を踏まえて、各土器型式圏の動態を精密に論じる方向を目指すべきであろう（**「東日本における中・後期の大別境界と広域編年軸」**）。

中期末葉には、後期初頭の称名寺式が伴うという意見は、平成 15 年現在においても、なお根強く支持されている。そこで、加曽利 E4 式と称名寺式が伴出した事例に乏しい茨

城県を基点として、それ以西の地域の諸資料を見直すと、どこでも加曽利 E4 式と共伴する「西日本系土器」は、「中津式」ではなく、中期末葉の未命名土器であると判明する。とりわけ、用田鳥居前遺跡で発見されたキメラ(折衷)土器の新例は、この西日本系の中期末葉土器と加曽利 E4 式の年代的な並行関係を端的に証明している。類例は、すでに稲ケ原A遺跡でも出土しており、中期末葉に西日本から東海地方を経由して、強い文化的な影響が波及していたことは否めない。したがって、1977 年以来主張されている「短縮編年」説は、東日本はもちろん、西日本においても、根本からの見直しが求められる。同時に、大木 10 式を後期初頭に編年する AMS による確率「暦年代」編年も、その妥当性が改めて問われることになろう（**「茨城県から見た本州島の中期末葉編年について」**）。

第２節 後期初頭～前葉の編年 ―関東と西日本を結ぶ―

西日本編年が混乱している原因は色々考えられる。なかでも細別単位としての「福田 K2 式」の捉え方や広域対比において、識者の間で著しい誤解が見られる。その誤解を側面から強力に支えているのが、千葉県武士遺跡の土壙から「称名寺Ⅱ式」と共に発見された「関西系土器」である。この事例を単純に「共伴」とみなす立場では、山内博士が「堀之内式のあるもの」に並行すると指摘した「福田 K2 式」を、「称名寺式」に対比することになる。これは今村氏が 1977 年に唱えた新説である。大方の支持どおりに「共伴」説が正しく、山内説は誤りなのであろうか。そこで山内博士が参照した堀之内貝塚の「福田 K2 式」資料をはじめ、正式に報告された武士遺跡の新資料を加えて検討すると、やはり「共伴」説は成立し得ないと判断される。目下の見通しでは、武士遺跡の「関西系土器」は、堀之内１式の中位の部分に対比され、福田 K2 式の中位の部分に並行すると考えられる。今村編年の見直しは、改めて焦眉の課題として提起されることになろう（**「再び、千葉県武士遺跡における「関西系土器」の編年について」**）。

福田 K2 式に先行する「中津式」についても、今村・玉田編年（1977, 1990・1991）を支持する通説の西日本編年には大きな疑問点がある。標式遺跡である中津貝塚の標本資料を詳細に分析すると、一般の「中津式」には、加曽利 E4 式等に対比される中期末葉土器が含まれていることが分かる。そうした混乱は、本来正しい記載がなされるはずの、考古学講座や辞書・辞典類にも見られる。中津貝塚の基本資料の弁別にもとづいて、瀬戸内・近畿北部の資料を細分し、それらを関東地方の諸資料と対比すると、並行する称名寺式は、都合８～９段階の小細別に分かれると予想される。さらに、称名寺式と中津式や東庄内式

の終末段階は、型式学的に対比できる共通した特徴を有していることも判明する。したがって、通説の「福田 K2 式＝称名寺Ⅱ式」説は成立し得ず、「福田 K2 式＝堀之内１式」という、筆者年来の対比案の妥当性が改めて確認されることとなる。この編年案は第７図のように纏められる（**「西日本から見た関東地方後期初頭末～前葉編年の検討　－中津貝塚・浜詰遺跡から称名寺貝塚・武士遺跡へ－」**）。

近畿地方では、一般に後期初頭の土器を「中津式」として捉えている。しかしながら、本来の中津式には貝殻条痕を持つ粗製土器が伴うはずである。それを欠いた琵琶湖以東や生駒以東、以南の土器群を「中津式」と呼ぶことには、やはり問題があると思われる。これは旧稿で述べたように、「東庄内式」として、明確に弁別しておくべきであろう。そこで近畿圏内では、中津式と東庄内式の分布圏の確定と、細分の徹底が求められる。これは混乱した西日本編年を是正するうえで、避けて通れない課題である。資料は十分に出揃っていないが、琵琶湖周辺と大阪湾周辺域の資料を遺跡単位で丹念に比べると、どこでも中津式は、瀬戸内と同様に貝殻条痕の粗製土器を伴い、１～４式に細分される。その結果、通説の「中津式」編年の誤謬も明瞭に捉えられるようになる。その結果をもとに、北九州から関東の後期初頭末期の資料を対比すると、旧稿で提案した編年構想には、何ら変更の必要は認められない。渡島から北九州にいたる中期末葉～後期前葉の編年の概要を纏めると、第８図と第 10 表のようになる（**「近畿地方中部における「中津式」の細分について　－近畿から南関東と北九州を結ぶ－」**）。

終章　列島中期末葉～後期初頭編年研究の過去と現在

戦前の編年研究

縄紋土器の研究は、戦前にどのように推進されていたのか。その流れを俯瞰するには、大変な紙幅を必要とする。現在、一般に通用している編年体系の根幹を山内博士が達成したことは広く知られている。しかしながら、現代においては勿論、戦前においても、戦後においても、編年研究の方法論は一度たりとも一枚岩であったことはない。むしろ、様々の異なる土器編年の考え方とその実践例としての編年案が錯綜しており、その実態は、混沌というほかない程に混乱に満ちている。

戦間期を含めて、戦前の編年研究には大きく三つの流れがあった。その第一は、山内清男を筆頭に甲野勇、八幡一郎による編年三羽烏の営みである。第二は、森本六爾亡き後に登場した杉原荘介・後藤守一を主幹とした東京考古学会の諸活動である。第三は、山内に

対して強いライバル意識を以って西日本を中心に活躍した、三森定男の国体論的な考古学の実践が挙げられる。

東京考古学会が熱心に推進したのは、山内編年体系の書き換えと翻案であった。編年体系の横軸の要であった加曽利E式を「姥山式」に取替えたのは、ほんの一例に他ならない。この山内編年の翻案運動は、戦後にも巧みに展開されているから、特に注意を要する。三森の列島編年体系は、国体論を前提として、考古資料の中に何とか神武東征伝承を読み取ろうとする目的をもっていた。この点はすっかり亡失されているが、三森の想像力に富む編年案の根本には、八幡流の「相」の概念が伏在していると考えられる。異型式の同時並存を当然する思考法は、その後、西日本の編年界でどのように克服されたのか。

総じて関東でも、東北でも、また西日本でも、「細別と大別」論文と『日本先史土器図譜』に象徴される、山内の編年研究の指針が、戦後、各地でどのように受容されたのか。その正確な実態の把握が、学史的には最も重要な論点になると思われる。

広域編年研究の実態

戦後の編年研究において、まず注目されるのは、1950年に刊行された『古代土器標本解説書』に附載された芹沢氏の編年表（第 11 表）である。戦前の山内編年をほぼ踏襲しつつ、細別記号をすべてローマ数字に取替えたものである。これは改変「山内編年」の第一版であって、爾後山内編年の体系は、東日本はもちろん、西日本においても、論者が交代するたびに著しく翻案され、換骨奪胎され、複雑に分岐して現在の諸編年に連なっている（第1章第2節）。その流れの中でも、特に注目されるのは、多くの読者に強い影響を与えた概説書や講座に発表された編年案である。たとえば、それを年代順に列挙すると、

1）芹沢長介（1956）「土器型式による縄文文化の編年」『日本考古学講座』3

2）江坂輝弥主編（1959）「日本各地の縄文土器形式と推定文化圏」『世界考古学大系』（日本Ⅰ）

3）小林行雄編（1959）「日本古代文化の土器型式による編年」『図解考古学辞典』

4）佐原真・横山浩一（1960）「日本先史時代土器編年表」『京都大学文学部考古学資料目録』附載（第 12 表）

5）鎌木義昌編（1965）「縄文土器編年表」『日本の考古学』Ⅱ

となる。いずれも山内博士の逝去（1970）以前に発表されたものである。多くの点で、戦前・戦後の山内編年とは、著しい相異同が見られる。中でも注目されるのは、2）と4）

の編年案において、中期末葉の大木 10 式が後期初頭に繰り入れられたことである。
中期～後期の「短縮編年」説のルーツは、東日本では２）の江坂編年に、そして、西日本では、４）の佐原編年に辿られることになる。この混乱の芽は、関東では安孫子氏（1971：第 13 表）や小林達雄氏の編年案（1978）として、西日本では、泉拓良氏（1976 稿：1982）や千葉豊氏（1989・1991）の編年案として、山内博士が逝去した直後、またそれ以後に多くの論者を巻き込みながら、熱心に検討されるようになった。とりわけ東西の編年に混乱の拍車をかけたのが、1977 年に発表された今村啓爾氏の列島編年案であった。中期末葉～後期中葉に及ぶ諸型式の対比案（第 14 表）は、今なお多くの支持者を得ているが、私見によれな、正しい部分はごく一部に止まる。

編年研究の基本方針の確認

さて以上のように、戦後に提案された諸編年には、中期末葉～後期前葉に時期を限っても、諸々の混乱が顕著に認められた。とりわけ、大木 10 式や加曽利 E4 式を後期初頭に繰り下げ、大別の中期と後期を癒着させた「短縮編年」説が問題となる。一方、恒常化した混乱状態にもかかわらず、1969 年には、「いつまで編年をやるか」との藤森発言（1969 年８月）が発せられた。完成に近い編年研究は措いて、縄文時代の文化論こそ、まさに研究されるべきテーマであると、「想念の考古学」（水野 19）に刺激された熱っぽい調子で主張したのである。

この発言は、松島湾において大木 9·10 式が称名寺式に対比され（林 1965）、また、加曽利 EⅢ式やⅣ式が幻の土器型式だと論じられ（堀越 1971・1972）、加曽利 E3 式並行の、曽利Ⅴ式が中期終末の型式である、と一般に信じられていた頃に登場した。

この藤森の見当違いの発言や、芹沢・江坂・佐原・吉田・林ほか、中期と後期を癒着させた「短縮編年」説を唱えていた戦後の諸編年案に対して、山内博士は、『ミュージアム』誌上に満を持して関東地方の新編年案（中期：加曽利Ｅ１～４式→後期：称名寺式の記載）を発表した（山内 1969）。ここにいう「称名寺式」には、西日本系の中期末葉土器や加曽利 E3・E4 式などは、もちろん含まれない。列島縄紋土器編年の中軸をなす、新関東編年の提示を以って、戦後編年に見られる様々な誤謬を総括的に批判したものであって、「密室編年」などという評価は、まったく論外であると言わねばならない。

この『ミュージアム』編年に至る博士の編年研究の歩みをたどり、また改めて「細別と大別」論文に簡潔明瞭に記された研究指針を再認すると、1970 年代以後における編年研究

の混乱が、実は、この論文の理解不足に起因するところが、極めて大であると考えられる。恩師である藤森の発言を受けて、山内編年に対するステレオタイプな批判を繰り返している戸沢充則氏の諸論文も、その代表的な一例に他ならない。

では、一体どのようにして列島編年研究の混乱を克服すべきか。処方箋は、すでに「細別と大別」論文に簡潔明瞭に記述されている。その実際の適用において、最も困難な課題となるのが、究極の小細別編年網を列島レベルで確立することである。この作業は、以上に例証として掲げたどの研究者も着手してはいない。まさに戦後編年研究において、未踏の分野として存在していると思われる。

以上に5章にわたって述べた煩瑣な土器分析の大要は、こうした作業を本格的に推進するための、いわば準備作業の一端にほかならない。山内博士の編年研究の歩みをトレースし、準備作業の成果と対比すると、第15～17表のようになる。

このうちの第17表は、加曽利E3·4式期が（大木9·10式並行）6段階、加曽利E4式（大木10式並行）が6段階、称名寺式（門前・中津式並行）が、8～9段階、堀之内1式（宮戸1b式・福田K2式並行）が6段階、それに堀之内2式（南境・津雲A式並行）が後続するという、筆者の小細別編年の構想を簡略に整理したものである。

1970年代には、加曽利E3·4式～称名寺式までが同時代とされ、山内編年体系に対する批判が異常な高まりを見せていた（多摩ニュータウン編年・団塊の世代の諸編年案）。それから、30余年を経て、今も中期末葉と後期初頭の土器を同時代とする意見は、関東でも西日本でも、一向に跡を絶たない。最近は、この恒常化した混乱に輪をかけて、理化学手法による編年を、いたずらに称揚する動きが目立っている。

AMS確率「暦年代」編年法について

もちろん編年研究の方法は、伝統的な土器型式学に限らない。編年研究を過去の文物の「年代」を捉える作業とするならば、その「年代」を推定する方法としては、年輪年代やAMSによる確率「暦年代」など色々あげられる。AMSによる「土器個体」編年法は、最近マスメディアで華々しく喧伝されており、弥生時代の年代をBC1000年まで遡及させる、センセーショナルな説で世間を騒がしている。

そのAMS編年法に係わる研究者の発言を集めてみると、いろいろ奇妙な事例に遭遇する。疑問の点は多岐にわたるが、根本的な問題点としては、AMSによる確率「暦年代」を土器型式に付会する方法が、果たして妥当であるかどうか、という問題があげられる。

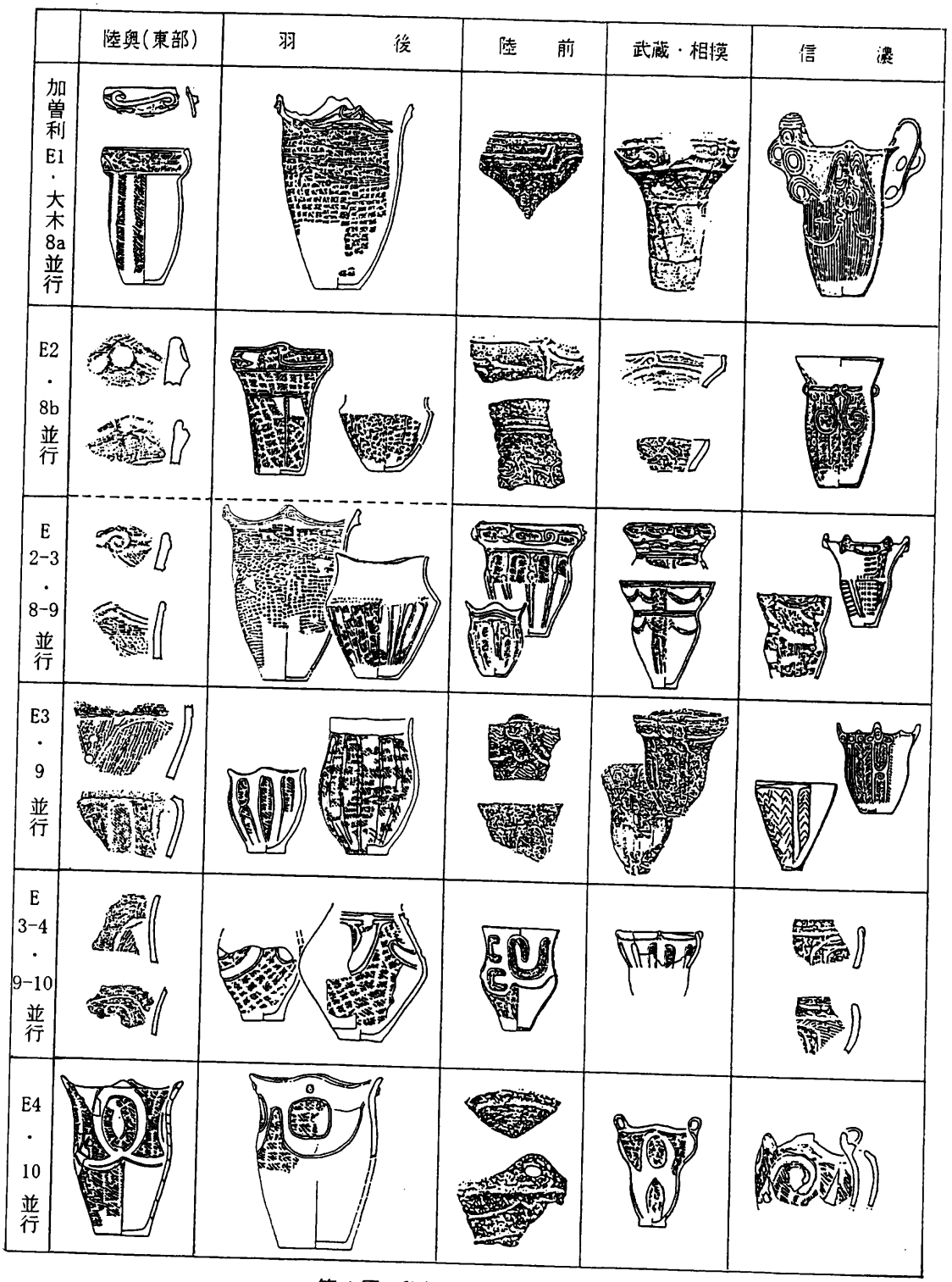
一型式に属する土器個体には、計測標本の点数だけ複数の確率「暦年代」が与えられる。それは勿論、年代学上の単位としての「土器型式」を意味しない。一型式と鑑定されて来た土器個体は、確率論上の根拠である年代幅に収束、あるいは分散する一資料に戻るわけである。AMS で「暦年代」を測定しなければ、各個体の同時性は判明しないから、編年を目的とした土器分類は、方法としての型式学ではなく、原理的には先ず測定年代が左右する問題となる。この確率「暦年代」を用いた最新の土器編年法は、ある意味で 21 世紀に登場した新しいタイプの編年研究批判とも言える。

ところで冒頭で触れた藤森栄一と、この AMS を代理人とした新旧の相対編年研究批判には、不思議な共通点がある。日本の編年研究は世界に冠たる高い水準で達成されている、という認識である。この発言は、単に編年研究の高低差を云々するのであれば、ある意味で正しい。しかし上述のごとく、世界に誇る列島編年の内情を点検してみれば、この認識が、いかに現状を踏まえない発言であるかは、容易に了解されよう。

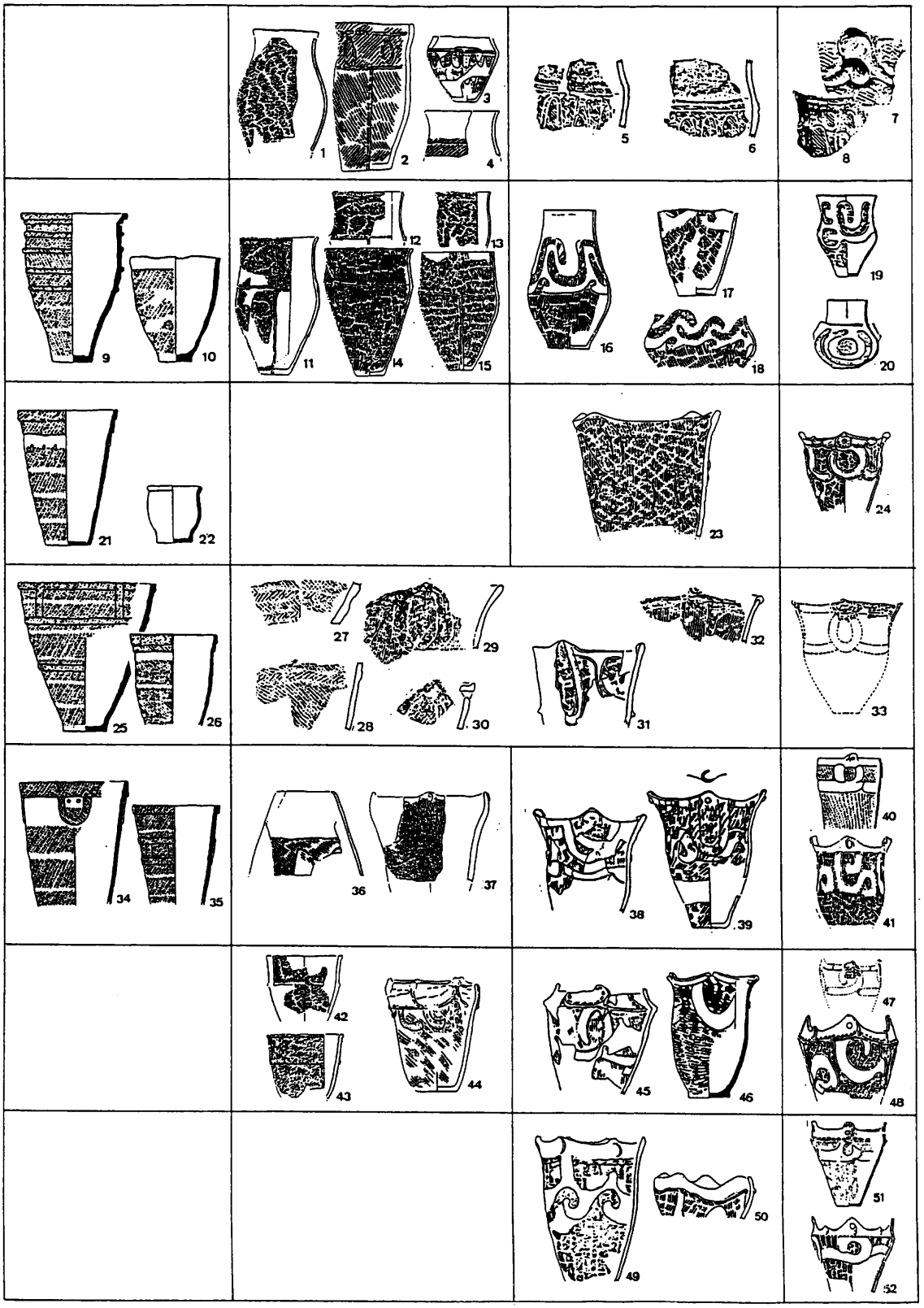
一例として、AMS による理化学編年法をリードする小林謙一氏が援用する土器編年案（第 18 表・第 9 図）に注目すると、中期末葉の「大木 10 式」は、後期初頭の「中津式」や「称名寺式」と同時代とされ、「後期初頭」とされた標本資料には、中期末葉の土器が多量に含まれている。この大別交錯型の編年案は、1960 年代前後に登場した江坂編年や佐原編年と本質的に何も変わりない。その妥当性は、AMS で測定した炭素の確率「暦年代」が保障するという。ついに戦前に起源する編年体系の恒常的な混乱状態に対して、理化学の「神の手」によって、もはや抹消不能な「お墨付き」が与えられたわけである。

何故こうした不可思議な事態になぜ陥ったのか。その根本の原因はどこに求めるべきか。考古学の根幹をなす型式学的な方法論について、伝統の相対編年派と理化学による確率編年派で、その理解が一致していないことは、誰にも容易に想像されよう。国体考古学や肇国の考古学が席巻していた戦前から、土器の型式論も、編年体系も、一度たりとも一枚岩になることはなかった。

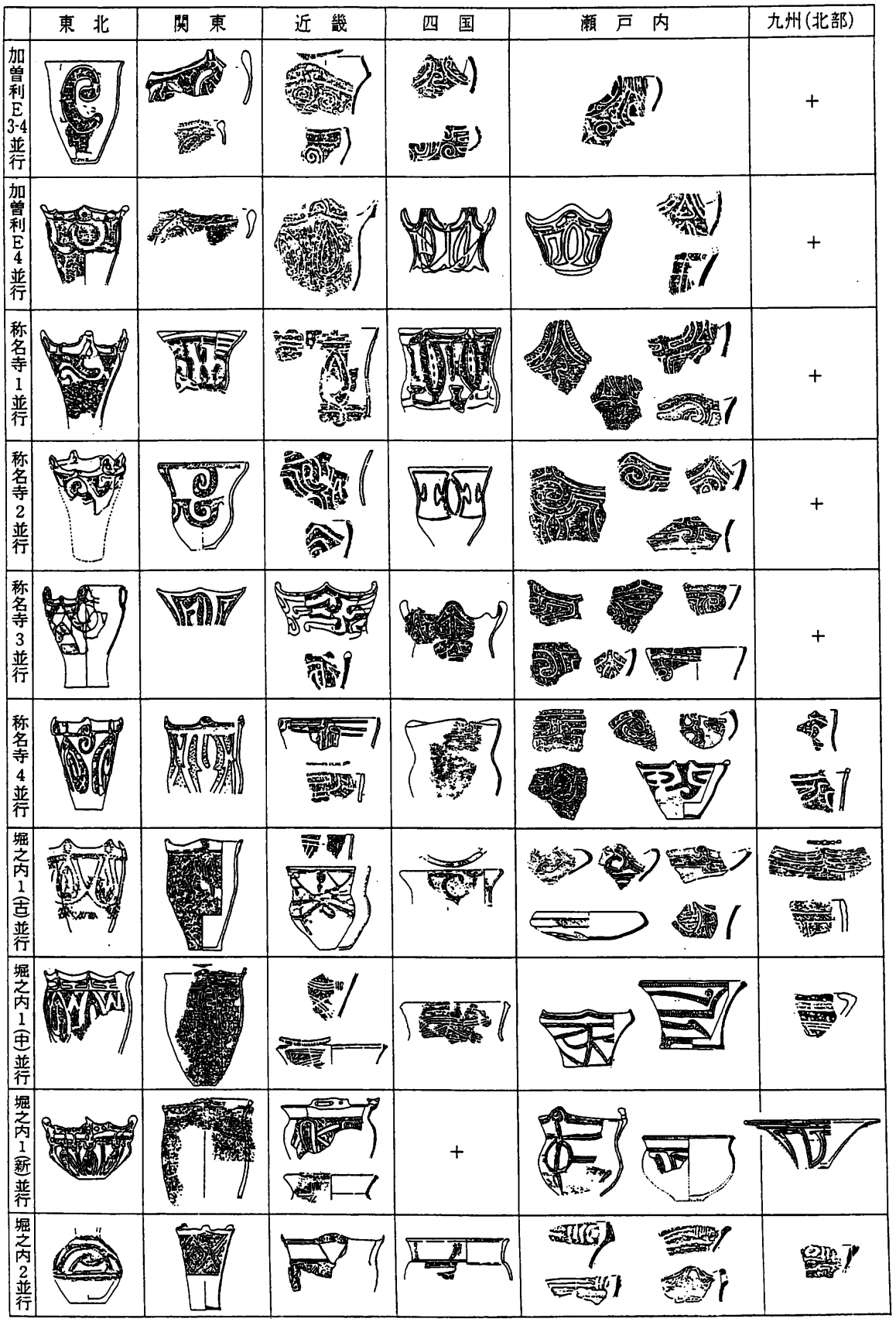
とは言え、本論のテーマである中期末葉～後期中葉における相対編年の混乱は、明らかに過去・現在の研究者が、c14 年代には何ら係わり無く、人為的に生み出して来たものである。したがって、「細別と大別」論文に明示された相対編年の手法を駆使して、列島レベルの小細別編年体系を構築することこそ、半世紀を遥かに越えた列島編年研究の混乱史に、真の終止符を打つ、唯一の道であると考えねばなるまい。



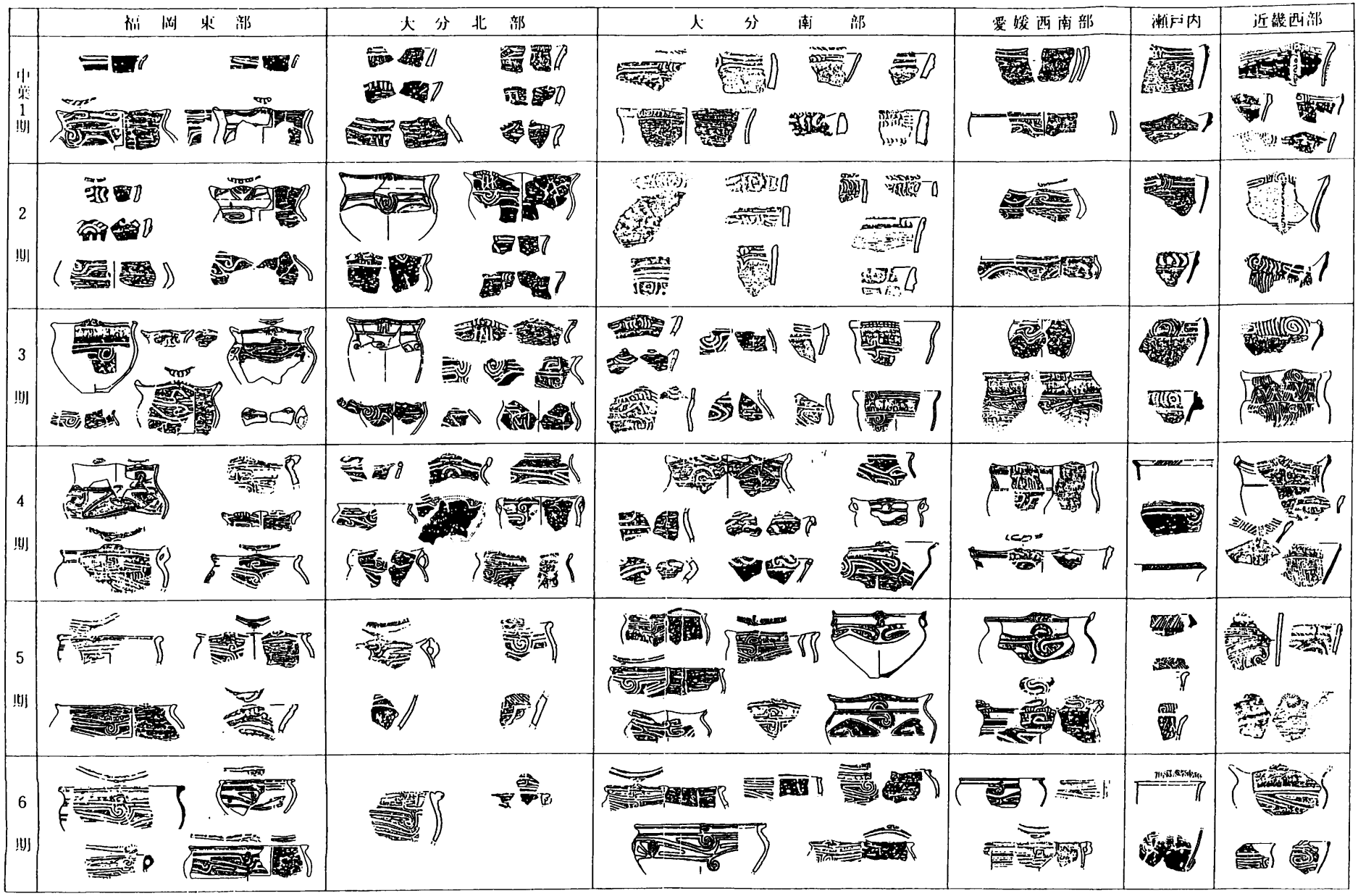
第１図　陸奥～信濃地方の中期後半広域編年案



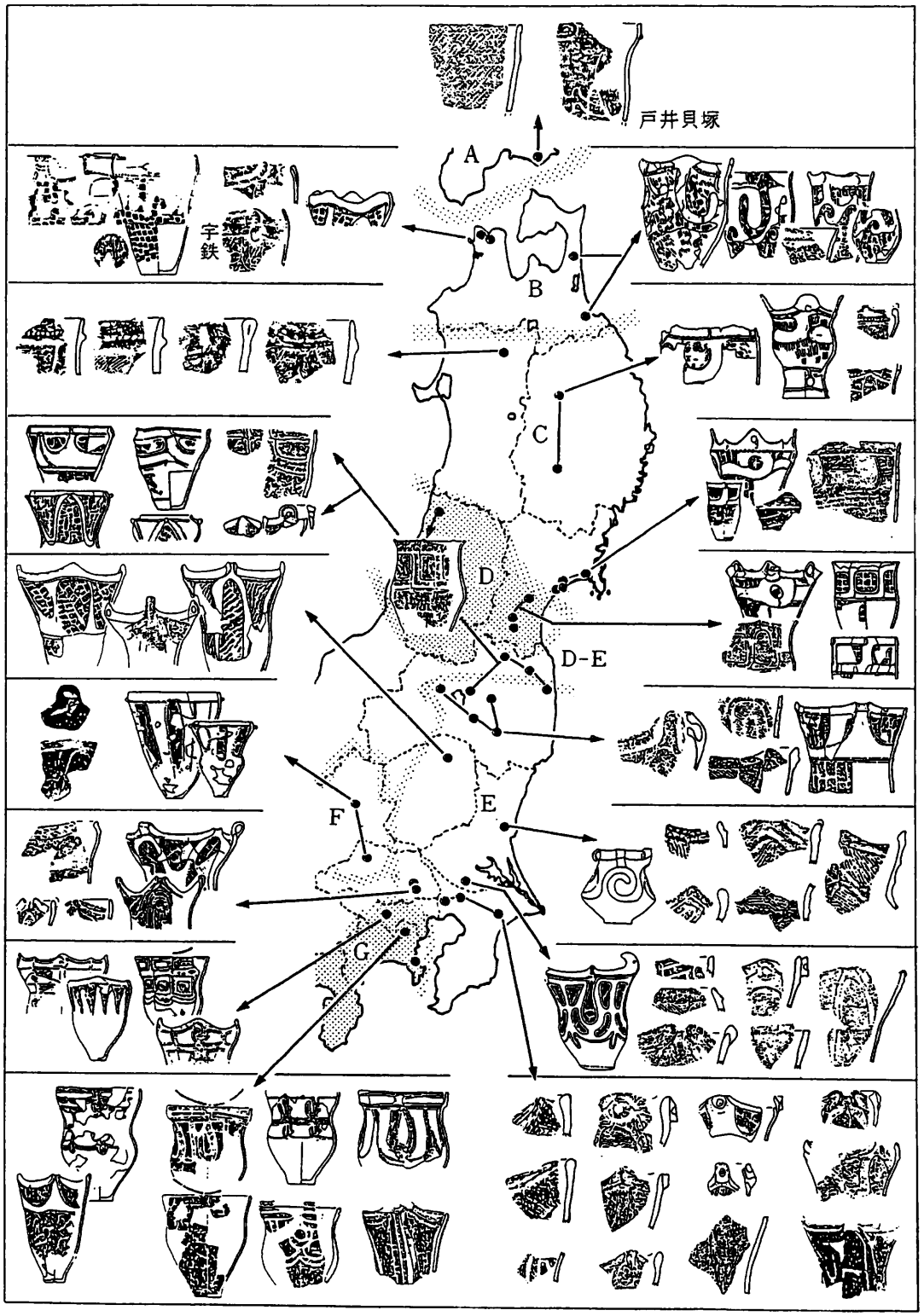
第２図　宮城(陸前)・青森(陸奥)・北海道南部（渡島）編年の対比



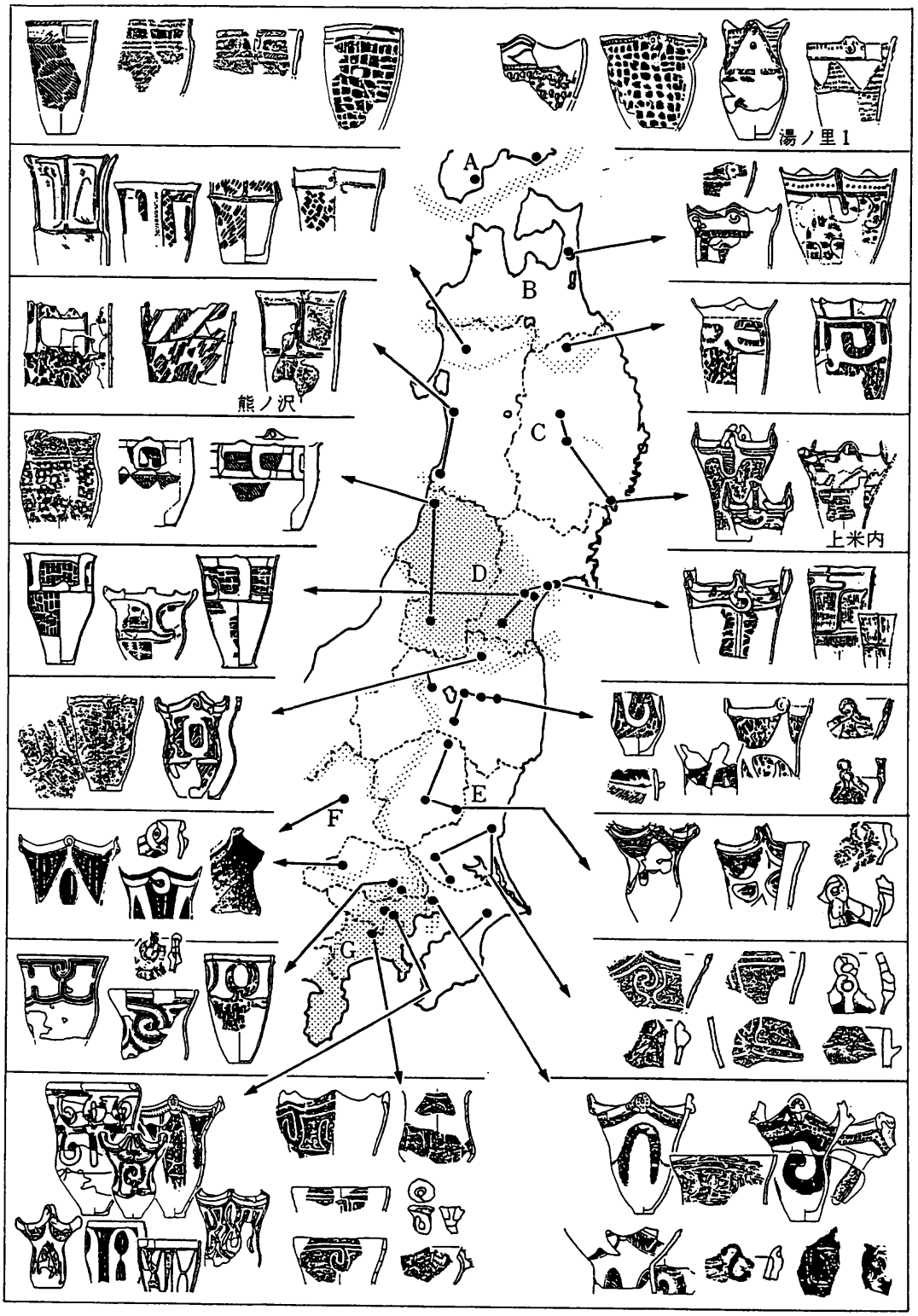
第３図　列島レベルで見た中期末葉～後期中葉の広域編年案



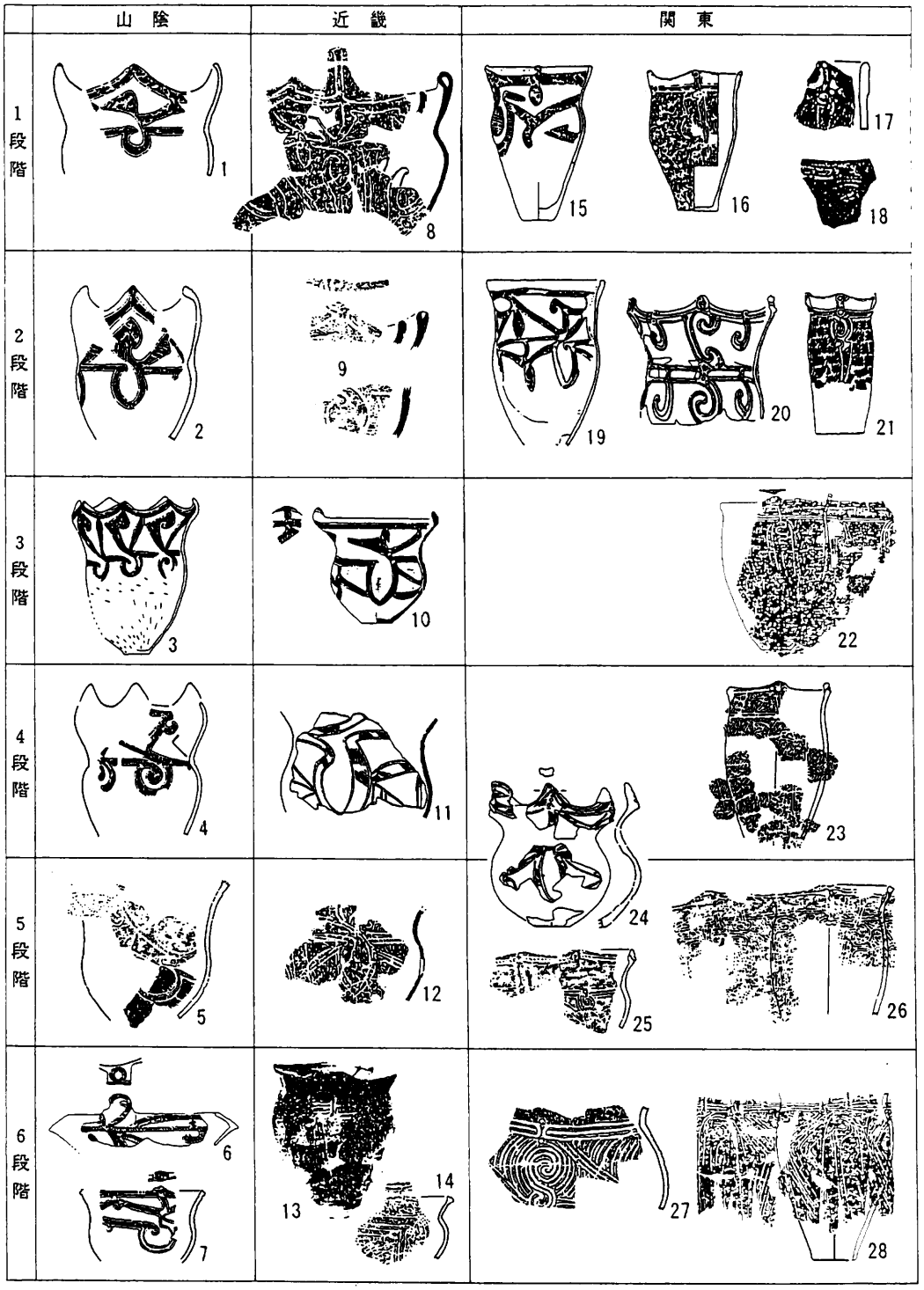
第4図　後期中葉1～6期における西日本編年の概要



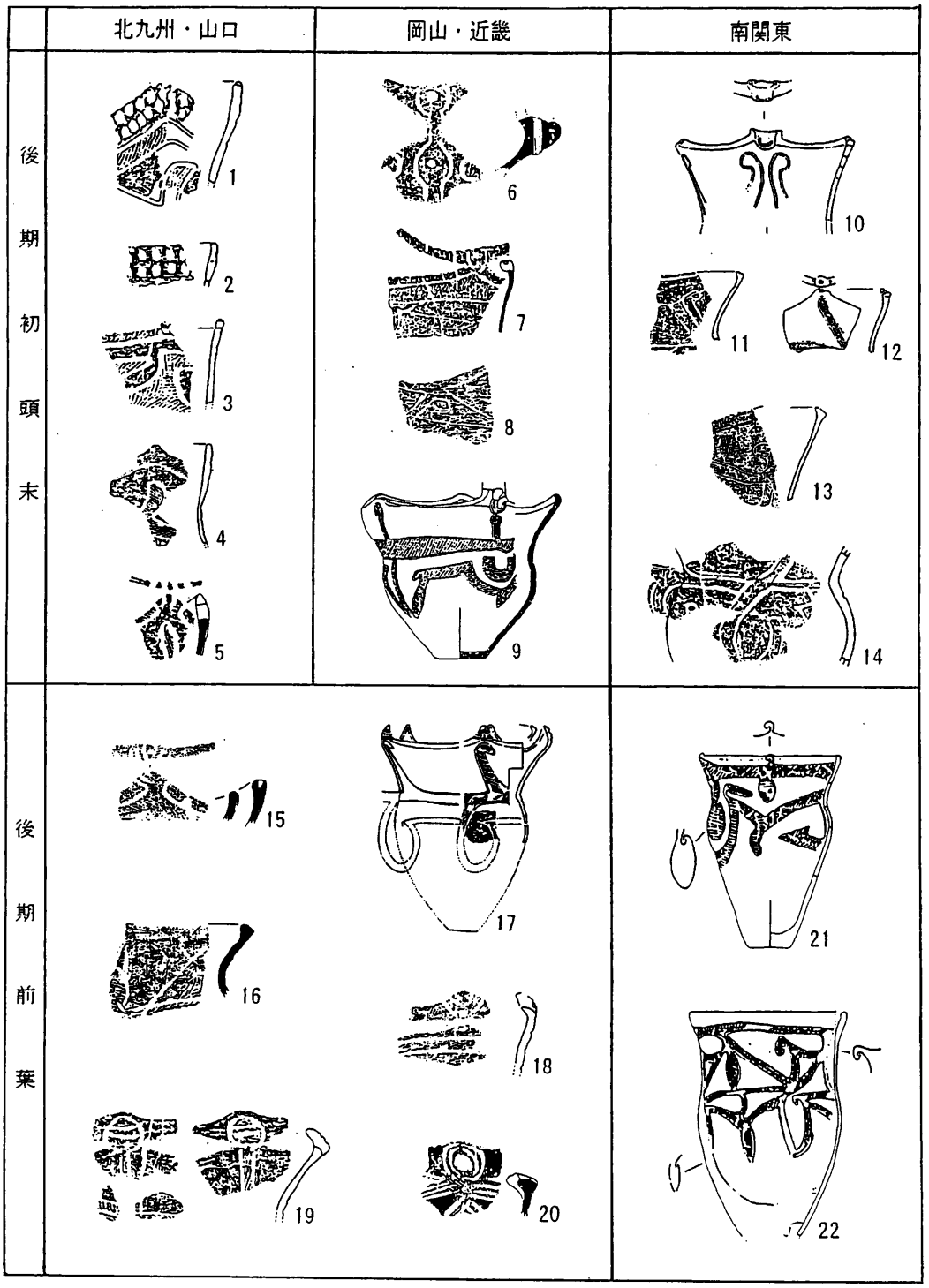
第５図　東日本における中期末－加曽利Ｅ(新)式期の広域編年案



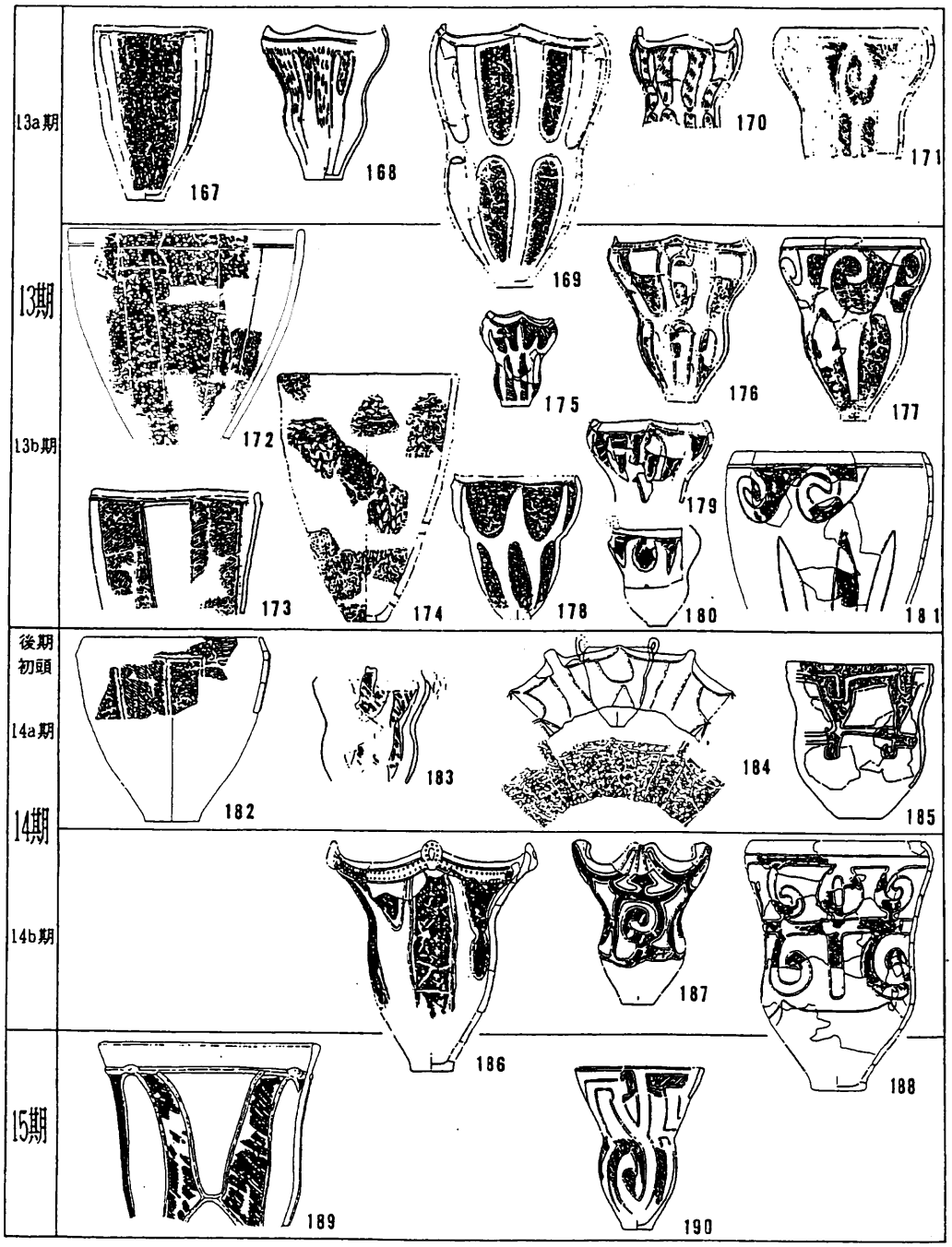
第６図　東日本における称名寺式１期の広域編年案



第７図　広義の福田Ｋ２式期編年と関東編年の対比案（暫定的）



第８図　口縁部装飾から見た後期初頭末期～前葉初期の広域編年



第９図「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」(黒尾・小林・中山ほか 1995)

第１表　中期末葉～後期中葉の陸前～吉備編年の推定原案

ゴチック：昭和４年以前に設定された型式

＋　　：昭和４年以前に確認された未命名の型式

《ゴチック》：昭和25～26年に設定された型式

（　　）：昭和14年以前に相当する土器を出土した遺跡

	陸奥	陸前	関東	吉備／近畿
中期	＋	**大木９**	**加曾利Ｅ３** （弁天遺跡） （扇山遺跡）	＋ （北白川終町遺跡）
	（堀田）	［大木9-10］ （青島貝塚下部貝層）		＋ （北白川小倉町遺跡）
	＋	**大木10** （青島貝塚） （川下り響貝塚下部貝層）	加曾利Ｅ４ （槻沢遺跡） （西秋留遺跡）	**《福田Ｃ》** （中津貝塚） （津雲貝塚）
後期		＋ （川下り響貝塚第２層上部） （川下り響貝塚第２層最上部）	＋ （女方・称名寺） （荒立貝塚） （槻沢遺跡） （姥山貝塚）	**《福田Ｋ１》** （津雲貝塚）（中津貝塚）（安土遺跡）
	＋	＋ （宝ケ峯貝塚下層） （川下り響貝塚第２層最上部）	堀之内１	**《福田Ｋ２》**
	＋ （オセドウ上層）	境２	堀之内２	（北白川小倉町遺跡）

第２表　東北後期初頭～中葉の編年　（　）：該当する時期の資料を出土した遺跡

	新井田川流域 馬淵川流域 （岩手・青森）	北上川上流 （岩手県盛岡市・大迫町周辺）	北上川中流・横手盆地（岩手県北上市・秋田県）	仙台湾 （宮城県）
後期初頭	駒板１群	（観音堂）	（八天）（八木）	門前１
	２群	（湯舟沢）（観音堂）	（八天）（八木）	門前２
	３群	（湯舟沢）（観音堂）	（八天）（八木）	門前（３）
	４群	（湯舟沢）（観音堂）	（八天）（八木）	門前（４）
前葉	蛍沢Ａ群	（卯遠坂）（立石）	（八天）（八木）	宮戸１ｂＡ群
	蛍沢Ｂ群	（卯遠坂）（立石）	（八天）（八木）	宮戸１ｂＢ群
	蛍沢Ｃ群	（立石）	（八天）（八木）	宮戸１ｂＣ群
中葉	十腰内１	（湯舟沢）（立石）	（八天）（八木）	南境

第3表　東北・北海道南部の中期末葉編年(暫定)

札幌低地帯 積丹半島	＋	伊達山	大谷地 （古）	大谷地 （新）	大谷地 〔新々〕
函館周辺	湯の里 （1）	湯の里 （2）	湯の里（3） （古）	湯の里（3） （中）	湯の里（3） （新）
津軽半島	＋	＋	宇鉄（古）	宇鉄(新)・山崎	山崎
下北半島	富の沢	＋	弥栄平（古）	弥栄平（中）	弥栄平（新）
岩木山麓			大曲（古）	大曲（新）	
津軽南部		井沢1	井沢2（古）	井沢2（中）	井沢2（新）
米代川流域	天戸森	天戸森	本道端（古）	本道端（中）	本道端（新）
秋田市周辺	下堤E	坂ノ上E	下堤（古）	下堤（中）	下堤（新）
仙台湾	大木9	大木9-10	大木10a，b	大木10c1，c2	大木10d1，2

（1989. 12. 12作成　1990. 05. 28補）

注：大木9～10式・伊達山式以外は並行資料を出土した遺跡名を示す。

第4表　加曽利E式後半期の編年

東北北部	東北南部	関　東	北　信	近　畿	中　国	四　国
＋ （井　沢） 泉　山	大木9 大木9—10 中間式 大木10	加曽利E3 加曽利E3 —4中間式 加曽利E4	＋ （小丸山・ 荒海渡） （荒海渡）	＋ （柳谷口） （布　留）	＋ （片吹・桂 見） ＋	＋ （ナカンダ 浜） ＋

第5表　瀬戸内・山陰・近畿北部の中期末葉～後期初頭の編年試案

岡山（吉備）	兵庫（播磨）	鳥取（因幡）	京都（丹後）	大阪 京都（山城）	関　東	東　北
里木貝塚 （古・新） 朝寝鼻貝塚？	片吹A1 片吹A2	桂　見 見蔵岡	柳谷口(古) 平・裏陰A	「北白川C4(一部)」	加曽利E3 （古～新）	大木9 （古～新）
中津貝塚B 日羽健行田A 中津貝塚C	片吹SB08 （新）	桂　見	平KⅢ （柳谷口(新)） 裏陰B	「北白川C4(一部)」	加曽利E3—4 （古～新）	大木 9—10 （古～新）
中津貝塚D 日羽健行田B	＋	桂　見	裏陰C （古～新）	小阪・日野寺	加曽利E4 （古1～新2）	大木10 （a～d2）
中　津　1～4					称名寺1～4	門前1～4

第６表　後期中葉における西日本―東日本編年案

地域	福岡東北部	福岡東南部		大分北部	大分南部				愛媛		広島・岡山 香川		京都・大阪 三重	千葉	東北	北海道
	遠賀・苅田周辺	豊前周辺		中津・宇佐周辺	国東半島	大分川流域	大野川流域									
前葉末期	永犬丸（１区２ｂ層）貫川			森				小池原下層（１）	鶴来が元宿毛		洗谷 福田貝塚		京大植物園（１）東土川	堀之内１（新）	宮戸１ｂ（新）蛍沢（新）	涌元
中葉1期	＋ 貫川	中村石丸	中村石丸（１）（包）	森（１）？	下堀田（１）		前小池原上層	横尾（１）寺の前（１）コウゴー松（１）	平城１	平城（１）熊谷古照	津雲Ａ古	洗谷	縄手（１）京大植物園（２）仏並710Ｄ新（１）	堀之内２（古）	南境・十腰内１（古）	＋
中葉2期	＋ 貫川		中村石丸（２）（包）	飯田二反田（包）立石（２）森（２）西和田下層	下堀田（２）	十合野 ＋？（包）		小池原下層（２）横尾（２）寺の前（２）コウゴー松（２）		平城（２）	津雲Ａ中	芋平	縄手（２）京大植物園（３）仏並710Ｄ新（２）			
中葉3期	元松原・勝円Ｃ（表採）（包）稗田川（包）		中村石丸（３）３住・（包）山崎（１）（包）土佐井６住	飯田二反田（包）？森（３）立石（２）西和田上層（１）	下堀田（３）	十合野（１）［３Ａ］号遺溝（包）		寺の前（３）コウゴー松（３）		平城（３）文京	津雲Ａ新	津雲（１）永井	縄手（３）京大植物園（４）仏並710Ｄ新（３）	堀之内２（中）	南境・十腰内１（中）	
中葉4期	鐘崎 勝円Ｃ（包）下吉田（包）	鐘崎１	中村石丸（４）１住・（包）山崎（２）４住	飯田二反田６住 佐知16号・森（４）西和田上層（２）	下堀田（４）	十合野（２）１・２Ａ号遺溝（包）	小池原上層	小池原上層（１）	平城２	平城（４）	彦崎Ⅱ古	津雲（２）永井１（１）E20-4（古）	縄手（４）下川原ＳＢ９北白川（１）			
中葉5期	鐘崎		中村石丸（５）10住・（包）山崎（３）３住	飯田二反田（包）立石（３）西和田（撹乱層１）	？	十合野（３）３号遺溝（包）		小池原上層（２）		平城（５）	彦崎Ⅱ中	彦崎 永井１（２）E20-4（新）E20-3	縄手（５）淡輪１号住北白川（２）	堀之内２（新）	南境・十腰内１（新）	
中葉6期	鐘崎		中村石丸（６）６住・（包）		下堀田（５）	十合野（４）２号遺溝（包）		小池原上層（３）		平城（６）	彦崎Ⅱ新	永井１（３）E20-1・2	縄手（６）北白川（３）			
中葉7期以降		鐘崎２	山崎７住（一部）	飯田二反田１住（包：一部）西和田（撹乱層２）		横枕Ｂ（包：一部）	鐘崎２	コウゴー松	＋			永井	縄手	加曾利Ｂ１	宝ケ峰・十腰内２	入江

ゴチックは型式名

第７表　環瀬戸内編年と近畿・関東編年との対比

	九州北部	四国西部	瀬戸内	滋賀・京都	大阪	奈良	三重	千葉
前葉 1〜2	立石貝塚 貫川	宿毛	福田 K2 (古)	今安楽寺 (1・2)	+	+	新徳寺 (包含層)	堀之内 1 (古)
前葉 3〜4	立石貝塚 貫川	宿毛	福田 K2 (中)	今安楽寺 (3・4)	四ツ池 (古 1)	広瀬土壙 40 (古)	新徳寺 (包含層)	堀之内 1 (中)
前葉 5〜6	貫川	宿毛	福田 K2 (新)	今安楽寺 (5・6) 福満寺 京大植物園 (古)	四ツ池 (古 2〜3) 仏並（古 2） 芥川 (古 1〜2)	中戸 SB25 広瀬土壙 40 (新) 中戸 SK26	新徳寺 SX10 新徳寺 SD15 新徳寺 SK19	堀之内 1 (新)
中葉 1	中石丸 (古) 下堀田	ポスト宿毛	津雲 A 松ノ木	正楽寺 京大植物園 (新)	四ツ池 (新 1) 仏並（新 1） 芥川（新 1）	+	新徳寺 SH207(古)	堀之内 2 (古々)
中葉 2	中石丸 (中) 下堀田	ポスト宿毛	津雲 A 松ノ木	正楽寺 京大植物園 (新)	四ツ池 (新 1) 仏並（新 2） 芥川（新 2）	+	新徳寺 SK41	堀之内 2 (古)
中葉 3	中石丸 (新) 下堀田	+	津雲 A 松ノ木	正楽寺 京大植物園 (新)	四ツ池 (新 2) 仏並（新 3） 芥川（新 3）	+	新徳寺 SH207(新)	堀之内 2 (中)

（ゴチック文字は型式名を示す）

第８表　北海道〜中部地方中期後半土器の編年（案）

北海道 (渡島半島)	青森 (八戸・下北)	宮城 (仙台湾)	東京 (石神井川流域)	山梨 (甲府盆地)
(臼尻)	(榎林・泉山)	大木 8 a	加曽利 E 1	曽利（古々）
(臼尻)	榎林	大木 8 b	加曽利 E 2	曽利（古）
(ノダップⅡ)	榎林・最花	大木 (8-9)	加曽利 E(2-3)	曽利（新）
(湯の里 1)	(最花・野毛)	大木 9	加曽利 E 3	曽利（新々）
(湯の里 2)	(泉山)	大木 9-10	加曽利 E 3-4	(金の尾)
(湯の里 3)	(弥栄平)	大木 10	加曽利 E 4	(釈迦堂)

第９表　東北〜近畿地方における中期後半〜後期前葉の精製土器の紋様帯（漸定）

東北地方東南部	関東地方南部	近畿・中国内地方
大木 8 a (I°, I・II)	加曽利 1 (I°, I・II)	醍醐／里木 (I・II)
〃 8 b (I°, I・II)	〃 2 (+ I・II)	醍醐／里木 (I・II)
〃 8—9 (+ I・II)	〃 2—3 (I・II)	
〃 9 (I・II)	〃 3 (I・II)	北白川 C (I・II)
〃 9—10 (II)	〃 3—4 (I° ・II)	柳谷／片吹 (I・II)
〃 10 (I° ・II)	〃 4 (I° ・II)	布留／栗谷 (I・II)
門前 1 (I° ・II)	称名寺 1 (I° ・II) ／〔続 E 4〕	東庄内 1 (+ ・II) ／中津 1
〃 2 (I° ・II)	称名寺 2 (+ ・II)	〃 2／〃 2 (II)
〃 (3) (I° ・II)	〃 3 (+ ・II)	〃 3／〃 3 (II)
〃 (4) (I° ・II)	〃 4 (I° ・II)	〃 4／〃 4 (+ II)
宮戸 1 b (I° ・II)	東正院 1 (I° ・II) ／堀之内 1 (I° ・II)	〔四ツ池〕 (I°・II) ／福田 K 2 (I°・II)

——：紋様帯の影響関係に乏しい　〰〰：紋様帯の境界面

第10表　北海道島と九州島を結ぶ中期末葉～後期前葉の広域編年案

		渡島	東北	関東	東海	丹後半島	琵琶湖 大阪湾	瀬戸内	北部九州
中期末葉		湯の里Ⅰ 大木10 （古～新）	大木10 （古） （中） （新）	加曽利E4 （古） （中） （新）	林ノ峰 貝塚G層 （新）	裏陰 （古） （中） （新）	＋ ＋ 日野谷寺	＋ ＋ 寄倉岩陰	「阿高系土器群」
後期初頭	1期	天裕寺 戸井	門前1	称名寺1	東庄内1	中津1	中津 東庄内1	中津1	同上
	2期	天裕寺 戸井	門前2	称名寺2	東庄内2	中津2	中津 東庄内2	中津2	同上
	3期	＋	門前3	称名寺3	東庄内3	中津3	中津 東庄内3	中津3	中津3・同上
	4期	＋	門前4	称名寺4	東庄内4	中津4	中津 東庄内4	中津4	中津4・同上
後期前葉		涌元	宮戸1b （古）	堀之内1 東正院1 （古）	堀之内1 東正院1 （古）	福田K2 （古）	福田K2 （古）	福田K2 （古）	福田K2（古） 在地系土器

ゴチック：型式名

第11表　『古代土器標本解説書』第Ⅱ集掲載の「縄文式土器の型式編年表」（芹沢1950）

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉町 ○根法華	○狗見台 ○吹切澤 ○タヂマツ ○ノツコロ	槻木Ⅰ 槻木Ⅱ	○稲荷台 ○平坂Ⅰ ○井草（花輪台？） ○平坂Ⅱ 三戸 田戸下層 田戸上層 子母口 茅山	○下り林× ○立野馬？ ○（＋） ○（＋） ○（＋） （＋）	ひじ山？ ○平井Ⅰ ○平井Ⅱ ○（＋） 粕畑	○（＋） ○（＋）	黒島×	戦場ヶ谷×
前期	石川野× （＋）	円筒下層式 （＋） （＋） （＋） （＋）	貝塚 大木Ⅰ 〃Ⅱ 〃Ⅲ 〃Ⅳ 〃Ⅴ	蓮田式 花積下 關山 黒浜 諸磯a 〃b ○〃c 十三坊台	○（＋） （＋） （＋） （＋） （＋） 踊場	○木島 ○（＋） ○（＋） ○（＋） ○鉾ノ木 × ○（＋）	○（＋） — 國府・北白川Ⅰ 大歳山	磯ノ森 里木Ⅰ	轟？
中期	（＋） （＋）	円筒上層式 a 〃b （＋） （＋）	〃Ⅲa 〃Ⅲb 〃Ⅲa,b 〃Ⅰ,Ⅱ	五領台 勝坂 阿玉台 加曽利E Ⅰ 〃Ⅱ	（＋） （＋） （＋） （＋）	○柏葉 ○（＋） ○（＋） ○（＋）		里木Ⅱ	曾畑 阿高 出水 ？
後期	青柳町× （＋） （＋）	（＋） （＋） （＋） （＋） （＋） （＋） （＋）	（＋） （＋） （＋） （＋） （＋） （＋） （＋） （＋）	堀之内Ⅰ ○〃Ⅱ 加曽利B Ⅰ 〃Ⅱ ○〃Ⅲ ○曽谷 安行Ⅰ 〃Ⅱ	（＋） （＋） （＋） — （＋） （＋）	○（＋） ○（＋） ○（＋） ○（＋） 西尾×	北白川Ⅱ	津雲下層	御手洗 西平
晩期	（＋）	縄ヶ岡式 （＋） （＋） （＋） （＋）	大洞B 〃B—0 〃C1,C2 〃A,A'	○安行Ⅲa ○〃Ⅲb ○〃Ⅲc ○杉田（平瀬）	（＋） （＋） （＋） 佐野×	吉胡× 〃× ○（＋） 保美×	宮滝× 日下竹内× 宮滝×	津雲上層	御領

註1．本表は昭和十二年山内清男氏發表のものにその後の知見を若干加えて作製した。

2．ゴチックは型式名を示す。

3．○印はあらたに加筆あるいは改稿された型式名には○を附しておいた。

4．（＋）はまだ型式名のついていないもの（×）は型式名でなく他地方の特定型式と關連ある土器を出した遺跡。

第 12 表『京都大学文学部考古学資料目録』附載の「日本先史時代土器編年表」(佐原・横山編1960 を改変)

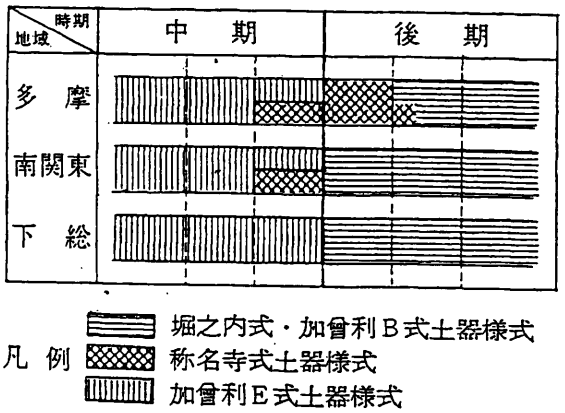
時代	地域	九州北部	中国	近畿	東海	関東	東北南部	東北北部
縄文式時代	早期	早水台	貴船 ○	神宮寺、大川 高山寺 石山Ⅱ 石山Ⅲ、Ⅵ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ	坂ノ湖 ○ 柏畑、上ノ山 入海Ⅰ、Ⅱ、○	井草・大丸 夏島、稲荷台 平坂・花輪台 田戸下層 田戸上層 子母口 野島 茅山下層 茅山上層	○ ○○○ ○ 槻木上層	白浜 吹切沢 物見台 ○
	前期	轟 〜曽畑〜	羽島下層 Ⅱ Ⅲ 磯ノ森 彦崎 Z Ⅰ Z Ⅱ 田井	○ 北白川 Ⅰ 下層 Ⅱ 大歳山 Ⅲ	木島 ○ ○	花積下層 関山 黒浜 諸磯 a b c 十三菩提	上川名・室浜 1 2a 2b 3 4 5 6 大木	○ ○ 円筒下層 a b c d
	中期	阿高 ○ ○	船元 里木Ⅱ 福田C ○	○ ○ ○	○ ○ ○ ○	五領台 阿玉台、勝坂 加曽利E Ⅰ Ⅱ	大木 7a 7b 8a 8b 9	円筒上層 a b ○ ○
	後期	○ ○ 称名寺 西平 三万田 御領	中津 福田KⅡ 津雲A・彦崎KⅠ 彦崎KⅡ ○ 福田KⅢ	○ ○ ○ ○ 元住吉山 Ⅰ Ⅱ 宮滝	亀山 西尾 蜆塚 Ⅰ Ⅱ	称名寺 堀之内 Ⅰ Ⅱ 加曽利B Ⅰ Ⅱ Ⅲ 曽谷 安行 Ⅰ Ⅱ	大木10 ○ ○ ○ ○	○ 大洞 ○ ○ ○
	晩期	○ ○ ○	○ 黒土 B Ⅰ B Ⅱ	滋賀里 丹治 橿原	吉ノ胡 B Ⅰ B Ⅱ B Ⅲ	安行 Ⅲ a Ⅲ b Ⅲ c 権現	B B-C 大洞 C_1 C_2 A A′	大洞 B B-C C_1 C_2 A A′
弥生式時代	前期	板付 立屋敷	門田	唐古Ⅰ	西志賀			
	中期	立岩 須玖 原ノ辻上層	○ ○○ ○	唐古 Ⅱ Ⅲ Ⅳ	朝日 貝田町 高蔵	須和田 宮ノ台 久ヶ原	大王山 州形団	
	後期	西新町	上東	唐古Ⅴ	熊畑 欠山	弥生町	○	田舎館

表中の○印は，該当する土器型式の名称が未確定または一般化していないもので，本目録では，— 式並行，一 期前半，— 期末などと表現したものである。

同一行中「、」でつらねたものは，時代が並行することを示し，「、」でつらねたものは，その前者が古く，後者が新しいことを示す。

地域，時期によって分類の精粗はかならずしも一様ではない。本目録に採録した土器型式は，なるべくあげるようにしたが，若干表示しなかった型式がある。

第 13 表 「縄文時代後期初頭の諸問題」掲載の「3地域の様式変遷」編年表（安孫子1971）



第 14 表 「称名寺式土器の研究」掲載の「縄文中期末〜後期初頭の編年」表（今村1977b を改変）

	瀬戸内	近畿	東海西部	東海東部	関東南西部	関東東北部	福島県	宮城〜岩手南部
中期末	〈+〉	平	(林ノ峰G層)	(入谷平)	加曽利EⅣ	加曽利EⅣ	大木10(古) 〈大木10(新)〉	大木10(古) 大木10(新)
後期初頭	中津Ⅰ 中津Ⅱ 福田KⅡ 津雲A	〈滋賀里〉 (縄手) 〈+〉 (縄手)	(林ノ峰G層) (林ノ峰E層) 〈+〉 〈林ノ峰C層〉 〈林ノ峰B層〉	〈山崎〉 〈山崎〉 (蜆塚)	称名寺IaIb 称名寺Ic 称名寺Ⅱ 堀之内Ⅰ(初) 堀之内Ⅰ	称名寺Ⅰ 称名寺Ⅱ 堀之内Ⅰ(初) 堀之内Ⅰ	〈綱取C貝塚〉 綱取Ⅰ 綱取Ⅱ	門前Ⅰ 門前Ⅱ 門前Ⅲ 宮戸Ⅰb

第 15 表　山内博士の関東・東北編年案の展開（1）

1929 年			1936 年			1937 年	
陸前	関東		陸前	関東		陸前	関東
大木　○	加曽利 E 1	中	大木 8a	加曽利 E	中・	大木 8a	加曽利 E
大木　8	加曽利 E 2		大木 8b	〃		大木 8b	〃
大木　9	加曽利 E 3	期	大木 9	加曽利 E	期	大木 9	加曽利 E(新)
境 1 ＝大木　10			大木 10	〃		大木 10	〃
	堀之内 1	後	(　)	堀之内	後	(　)	堀之内
境 2 ＝大洞 PreB3	堀之内 2	期			期		

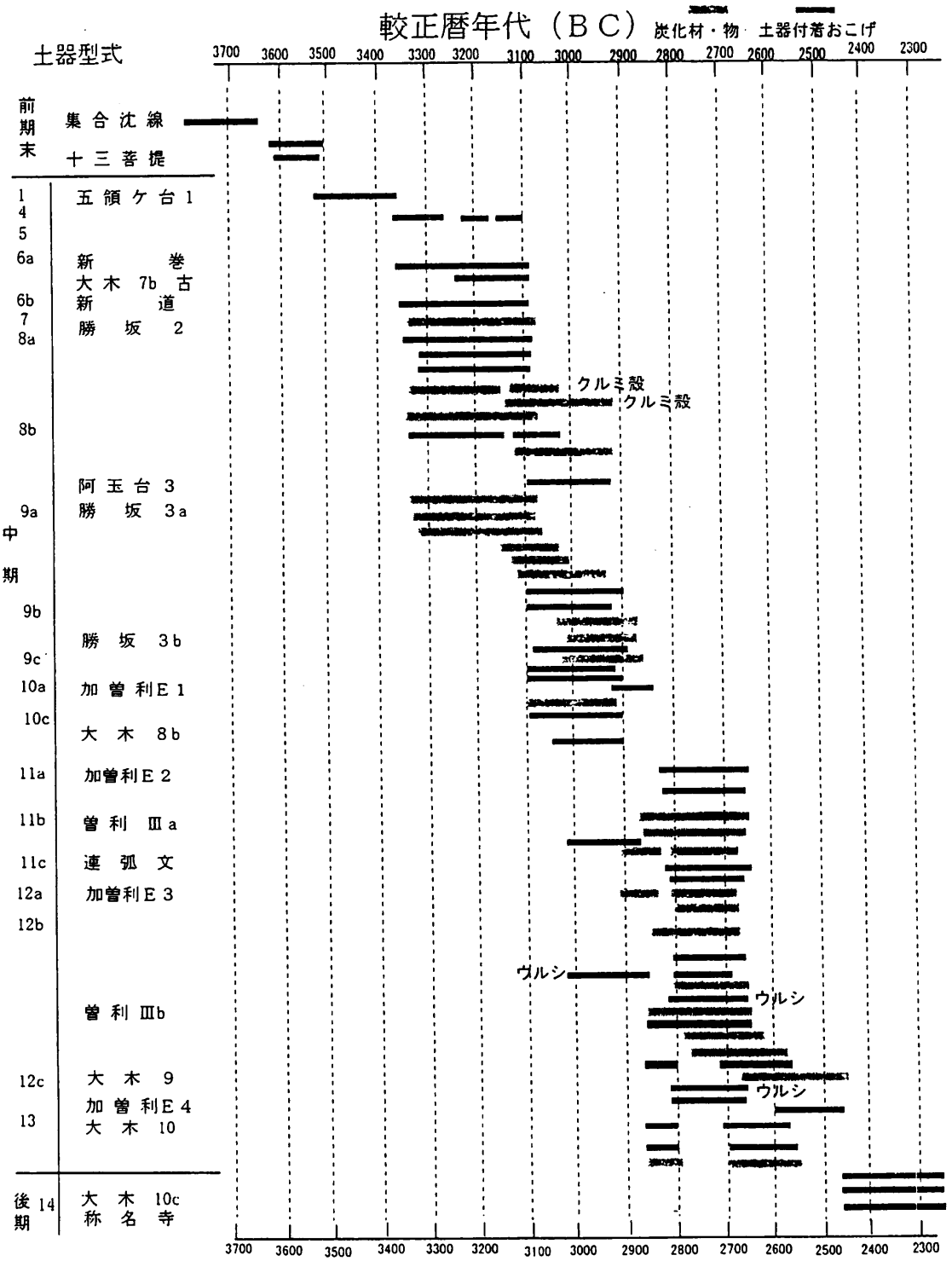
第 16 表　山内博士の関東・東北編年案の展開（2）

	1940 年			1969 年	
	陸前	関東		陸前	関東
中	大木 8a	加曽利 E 「最も古い部分」	中	大木 8a	加曽利 E 1
期	大木 8b	加曽利 E 「真の加曽利 E 地点の土器の大多数・下総上本郷 E 地点の土器」	期	大木 8b	加曽利 E 2
	大木 9	加曽利 E 「新しい部分」		大木 9	加曽利 E 3
	大木 10	加曽利 E 「最も新しい部分」		大木 10	加曽利 E 4
後			後	(　)	称名寺
	()	堀之内(旧)		(　)	堀之内 1
期		堀之内(新)	期	(　)	堀之内 2

第 17 表　陸前・関東の小細別編年案（1980 ～2003）

	陸前～陸中	関東	中部
中	大木 8a	加曽利 E 1	曽利 I
	大木 8b	加曽利 E 2	曽利 II
	大木 8-9	加曽利 E2-3	曽利 IIIB
	大木 9(古) 大木 9(中) 大木 9(新)	加曽利 E 3 (古) 加曽利 E 3 (中) 加曽利 E 3 (新)	曽利 IIIA 曽利 IV 曽利 V
期	大木 9-10(古) 大木 9-10(中) 大木 9-10(新)	加曽利 E3-4(古) 加曽利 E3-4(中) 加曽利 E3-4(新)	加曽利 E3-4(古)・[曽利 VI]？ 加曽利 E3-4(中) 加曽利 E3-4(新)
	大木 10(a, b) 大木 10(c1, c2) 大木 10(d1, d2)	加曽利 E 4 (古 1・2) 加曽利 E 4 (中 1・2) 加曽利 E 4 (新 1・2)	加曽利 E 4 (古 1・2) 加曽利 E 4 (中 1・2) 加曽利 E 4 (新 1・2)
後	門前 1 (古・新) 門前 2 (古・新) 門前 3 (古・新) 門前 4 (古～新)	続加曽利 E 4・称名寺 1 (古・新) 称名寺 2 (古・新) 称名寺 3 (古・新) 称名寺 4 (古～新)	(+) (+) 大安寺 (+)
期	宮戸 1 b(古) 宮戸 1 b(中) 宮戸 1 b(新)	堀之内 1 (古 1・古 2) 堀之内 1 (中 1・中 2) 堀之内 1 (新 1・新 2)	(+) (+) (+)
	南境	堀之内 2	(+)

第18表 「縄紋中期の較正暦年代（cal ＢＣ）(小林2002)



2002/2/8 GH分まで Ver2.11